HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	母子世帯と社会的孤立 ： ソーシャルサポートの側面から
Author(s)	江, 楠
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138, 251-274
Issue Date	2021-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.138.251
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82168
Type	departmental bulletin paper
File Information	17-1882-1669-138.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第138号　2021年6月

母子世帯と社会的孤立

―ソーシャルサポートの側面から―

江　　楠*

【要旨】 本稿では，母子世帯を，困ったことがある時に親が「頼りになる」，「頼りにならない」，「親はいない」の3つのグループに分けた上で，各世帯における，親および親以外の人からの受領サポートと情緒的・手段的サポートの状況を確認した。また，母子世帯の緊急時の支援の有無と経済的困難の重なりについても確認した。

以下の3点が指摘できる。第1に母子世帯は親と親以外の人からの受領サポートでは，親からの援助が重要な役割を担う一方で，親からの援助が得られないかつ，親以外に頼りになる人もない世帯が一定数存在した。第2に多くの母子世帯は相談相手という情緒的サポートでは，家族・親せき以外のサポートも利用するが，世話を頼む相手という手段的サポートでは，ほとんど家族・親せきに頼り，家族・親せき以外の人や制度を頼るものは少なかった。第3に経済状況が厳しく，かつ，緊急時の支援者がいないという困難が重なっている世帯が一定数存在した。
【キーワード】母子世帯，社会的孤立，ソーシャルサポート，情緒的サポート，手段的サポート

1. 研究目的

本稿の目的は，ソーシャルサポートの側面から，母子世帯の社会的孤立の実態を把握することである。具体的に，第1に，親および親以外の人からの受領サポートの状況を確認する。第2に，相談相手や世話を頼む相手から情緒的・手段的サポートの状況を確認する。第3に，母子世帯の緊急時の支援の有無と経済的困難の重なりについて確認する。

まずソーシャルサポートの概念について整理しておく。斉藤（2018）によると，家族だけでなく友人や近隣関係を含めた社会関係には，人数や交流の頻度など構造的側面を表す社会的ネットワーク／ソーシャル・ネットワークと，実際的・具体的な支援や情緒的な支援などの機能的側面を表すソーシャル・サポートがある。

富樫（2007）によると，ソーシャルサポートは「個人が他者たちとどのような関係をもっているかという社会関係の機能に関わる概念で，他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助」であり，情緒的サポートと手段的サポートに分かれる。また，Koyanoら（1994）は高齢者のソーシャルサポート（情緒的・手段的サポート）を次のように説明する。日本の高齢者の社会関係は家族中心の構造であり，サポートの源泉としての直系親族，傍系親族，

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程
DOI：10.14943/b.edu.138.251

非親族の間の差異は顕著である。提供者の負担が軽い情緒的サポートの場合には傍系親族や非親族にある程度期待することができるが，提供者の負担が重い手段的サポートの場合，期待できるのは直系親族にほぼ限られ，傍系親族や非親族に頼るのはかなり難しい。また，同居家族と別居子の安定したサポートより，傍系親族や非親族からのサポートの方が本人の健康度や経済力の影響を受けやすいことも示唆されている。

そこで，本稿では，親および親以外の人からの受領サポートについて明らかにする。その上で，ソーシャルサポート研究の枠組みを参考にし，相談相手・世話を頼む相手から母子世帯の情緒的サポートと手段的サポートを確認していく。さらに，母子世帯における緊急時の支援の有無と経済的困難の重なりについてもみる。

2. 先行研究

(1) 日本における母子世帯の孤立問題に関する研究

母子世帯と各種ネットワークに関する研究として，家計経済研究所（1999）があげられる。離別女性44人へのインタビュー調査にもとづくものである。多くの母子世帯は離婚後に，親から経済的援助や住居，子の世話に関する援助があることが示されている。親からの援助，いわゆる親との関係は母子世帯の生活に大きな影響を及ぼしている。

ふたり親世帯と比べて，母子世帯は親を含む親族ネットワークから孤立する傾向にあることを指摘する研究もある。山野（2017）は，子どもを育てるひとり親世帯（特にひとり親世帯の大半を占める母子世帯）の社会経済状況，社会関係資本，（母親の）抑うつなどについて，2012年に国立社会保障・人口問題研究所が実施した「生活と支え合いに関する調査」に基づき分析した。その結果，社会関係資本では，母子世帯ではふたり親世帯（いずれも祖父母非同居世帯）に比べて，家族・親族からのサポートが少ない傾向が見えた。

また，岩田（2013）[1]は，2008年に実施された北海道ひとり親世帯に対するアンケート調査結果を用い，ひとり親世帯にとって地域はどのように映っているのかを検討した。その結果，ひとり親世帯のネットワークと子育て関する支援は，母子・父子世帯ともに「近隣」も「知人や友人」も「ほとんど付き合いはない」という回答が，社会的経済に弱い立場の親で相対的に高いことを示した。また，子どもの悩みについて相談する相手や病気になったときに子どもの世話を頼む相手が「誰もいない」とする回答割合が高いこと，自分の親族からの援助を受けていない世帯もあることなど，地域からも親族からも孤立していることを指摘した。

江（2020）[2]は，本稿で使用するのと同じ，2017年に実施された「北海道ひとり親家庭生活実態調査」のデータを用い，未婚母子世帯の母の社会関係にどのような特徴があるのかを考察した。その結果，子育てをはじめとする日常的な支援は，親・親せきによるものが中心であり，親・親せき以外に頼れる人は少ない。また，諸制度をはじめとする各種情報が得られず，認知度と利用率が低いこと，母子世帯は各種ネットワークから孤立するリスクがあることを示した。

---

[1] 岩田（2013）で使用した調査，江（2020）で使用した調査と本稿で使用する調査はいずれも北海道で継続的に実施されているものである。それぞれの調査については，鳥山（2020）「北海道におけるひとり親世帯を対象とした生活実態調査」『教育福祉研究』第24号，1－4を参照して頂きたい。

[2] 注1と同様。

以上の先行研究から，母子世帯は，親をはじめとする親族ネットワークや，行政をはじめとする地域ネットワークから孤立しやすく，社会的孤立状態にある可能性も大きいことがわかる。また親からの援助は母子世帯の生活に大きな影響を及ぼす。しかしながら，親からの援助状況は，そもそも親の有無に左右される。親がいなかったり，また親がいても高齢などで頼りにできないこともあり，その状況により，ソーシャルサポートの意味や役割が異なってくると考えられる。しかしながら，先行研究では，親の有無という条件を分けずに，母子世帯の受領しているソーシャルサポートを議論している。そこで，本稿は江(2020)と同じデータを使用し，親の有無等を加味した形で，母子世帯のソーシャルサポートの状況を確認することを通して，母子世帯の社会的孤立の実態を把握していく。

(2) 孤立問題に関する量的な研究の方法

社会的孤立の量的把握は，高齢者を中心に行われてきた。

タウンゼント（山室監訳，1974）は，戦後ロンドン東地区における居宅老人の生活と親族綱について検討した。調査対象者（65歳以上の男性と60歳以上の女性の計203サンプル）の社会的接触を得点化した。具体的には，①親族のひとりとの一週間あたり平均接触回数を合計する。②親族以外の隣人や友人，さらに，地区の看護師，ホームヘルパー，医者をも含めた接触を加える。③その週間内の，その他の社会的活動に対する任意に選定された得点を加える。例えば，毎週クラブや映画，教会へ行くことには得点2が与えられ，フル・タイムの仕事は一週20，パート・タイムは10であった。その結果，1週間に21の接触かまたはほとんどない「孤立している」が10%，1週間22～ 35の接触の「やや孤立している」が13%，「孤立していない」が77%であった。

河合（2013）は，2011年に実施された，港区と山形県におけるひとり暮らし高齢者調査のデータを用い，ひとり暮らし高齢者の社会的孤立について分析した。タウンゼントの得点化の方法を参考にしながら，孤立の測定指標を作成した。その指標とは①子ども，親戚との関係，②正月3が日の過ごし方，③近隣関係，④友人関係，⑤社会参加状況，⑥緊急時の支援状況（病気や体の不調など困った時にすぐに来てくれる人）である。これらの指標について社会階層（所得，経済状況についての意識，持ち家の形態）による相違を基軸に分析した。結果として，ひとり暮らし高齢者は，経済的不安定層ほど孤立している者が多いこと，また，経済的不安定が家族ネットワークや地域ネットワークの形成にも大きな影響を与えていることを示した。その中で，⑥緊急時の支援状況（病気や体の不調など困った時にすぐに来てくれる人）という指標を重視し，「孤立状態であることを疑いなく承認できる指標」とした。そして，年間収入別に緊急時の支援者の有無をみて，緊急時の支援者がいない人の方が収入が少ない傾向にあることを確認した。さらに，因子分析によって抽出された「経済状況の不安定さ」を示す因子の得点の平均を，緊急時の支援者の有無別にみたところ，緊急時の支援者のいないグループは，明らかに経済的に不安定であることを示している。

タウンゼントと河合が高齢者の社会的孤立を把握したのに対して，阿部（2014）は他県からの移住者の社会的孤立について，東京大学社会科学研究所が実施した「福井の希望と社会生活調査」のデータを用いて検討した。表1は，社会的孤立指標の内容とそれぞれの指標を作成するのに用いられた調査項目である。これらの指標を用いながら，福井県生まれかあるいは県外からの移住者であるか，および居住年数と孤立リスクとの関係について検討している。

具体的には，社会的孤立を，社会的交流の欠如，社会的参加の欠如，社会的サポートの欠如の3つの下位カテゴリーに分け，それぞれについて，性別，年齢，世帯所得などの基本な設問の回答から指標を作成した。また，各指標は，カテゴリー内の項目が剥奪される場合を1，剥奪されていない場合を0として合算し，社会的孤立スコアを計算した。さらに，3つの社会的孤立スコアがカットオフ以上の場合に，「社会的孤立」とする二値変数を構築した。カットオフの値は，孤立率が概ね10％以下となると設定している。

以上のように，孤立問題に関する量的調査では，得点化して社会的孤立を測定し，孤立度の高さや低さについて確認する形がとられることが多い。しかしその一方，実際にどのようなソーシャルサポートの中で生活しているか，またどのような支援を受けているかについて確認することはできない。そこで，本稿では，阿部（2014）が社会的サポート（手段・情緒的サポート）として使用した調査項目を参考にし，母子世帯の手段的・情緒的サポートを確認していく。また，河合（2013）による「緊急時の支援者の有無」と経済状況との関連について，母子世帯の置かれている状況を検討する。

表1　社会的孤立指標の内容と用いた調査項目

	内容		調査票項目
社会的交流	会話の頻度，家族・親族・友人等との接触の欠如		人（家族を含む）と2～3日に1回以下しか話しをしない（電話やEメールも含む）割合
			友人・家族・親戚に会いに行くことが「経済的にできない
			親せきの冠婚葬祭への出席することが経済的にできない
社会的サポート	手段的サポート	困った時に頼りにできる人の欠如（病気の時，1人ではできない身の周りの仕事，金銭の貸し借り等）	病気の時の世話
			子どもや老親の世話と時々してくれる
			一人ではできない家の周りの仕事の手伝い
			いざという時にまとまったお金を貸してくれる
	情緒的サポート	悩み事の相談にのってくれる日と，寂しい時の話し相手などの欠如	転職・転居・結婚などの人生相談
			配偶者・家庭内でのトラブルの相談
			寂しい時の話し相手
社会的参加	組織・活動への参加の欠如（町内会，スポーツ・趣味の会などへの参加）		町内会・老人会・婦人会などに参加できない
			子ども・PTAなど子どもに関係する活動
			ボランティア・社会奉仕活動
			趣味・スポーツ

出所：阿部（2014）より筆者作成。

3. 研究方法

（1）使用するデータと分析対象

本稿の分析で用いるデータは，2017年に実施された「北海道ひとり親家庭生活実態調査」[3]

[3] 注1と同様。

（以下「北海道ひとり親調査」）である。本稿の分析対象は，「北海道ひとり親調査」の有効回答のうち，祖父母等と生計同一ではない[4]離別・未婚・非婚・死別世帯である母子世帯1,558である。

ただし，先行研究で指摘されたように，親からの援助は母子世帯の生活に大きな影響を及ぼす。しかしながら，親からの援助状況は，そもそも親の有無に左右される。そこで，以下の分析は親の状況別に，母子世帯におけるソーシャルサポートの状況を確認していく。

この調査では，「あなたの親は，困ったことがあるときなど，何かと頼りになりますか」をたずねている。回答の選択肢は「頼りになる」，「頼りにならない」，「親はいない」である。それぞれの選択肢により，親からの援助状況は異なる可能性があると考えられる。

「頼りになる」と回答する世帯は，具体的に親からどのような援助があるか。「頼りにならない」と回答した世帯は，ひとり親になった時も現在も，常に親からの援助がないのか。また通常では「頼りにならない」としても，何か困った時に一時的な援助があるかもしれない。「親はいない」と回答する世帯は，過去，親がいた時に，どのような援助があったのか。またそれぞれグループの母子世帯は，親以外にどのような社会関係があるかについても確認する必要がある。

表2は「困ったことがある時などに親は頼りになるか」の回答分布を示す。以下の分析では，「無回答」63世帯を除外し，「頼りになる」1,018世帯，「頼りにならない」413世帯，「親はいない」64世帯という3つのグループの母子世帯を対象として分析する。

また，アンケート調査にもとづく量的把握は，個々の母子世帯の生活の現実とソーシャルサポート（孤立状態の具体的な場面など）を知るということでは限界があると考えられる。そこで，本稿は同調査における自由記述の回答も引用する。

表2　困ったことがある時などに親は頼りになるか　（単位：世帯）

	頼りになる	頼りにならない	親はいない	無回答
母子世帯（1,558）	1,018	413	64	63

（2）分析で使用する調査設問

本稿では，阿部（2014）が社会的サポート（手段・情緒的サポート）に関する指標作成に使用した項目前掲の（表1）を参考にし，「北海道ひとり親調査」から社会的孤立に関わる調査設問[5]を抽出した（表3）。

---

[4] 今回は，子どもの祖父母（母親の親）と生計が同一である世帯は分析の対象にはしていない。生計同一世帯の方が母子のみで暮らす世帯よりも，親から援助を受けている割合は高い。

[5] 本稿で使用する「北海道ひとり親調査」は，ひとり親世帯の生活実態を把握するための調査である。家族の状況，仕事の状況，家計の状況，子育ての状況，ひとり親世帯になった前後の状況，回答者本人のこれまでと現在の生活（これまでの経験と社会関係），制度利用に関する調査設問を設けている。この調査で母子世帯のソーシャルサポートとしてとらえられる調査設問はかなり限定される。そこで，本稿では，阿部（2014）の社会的サポート（手段的サポート・情緒的サポート）という社会的孤立指標を参考にし，調査設問を抽出する。

表3　分析で使用する調査設問

調査設問	回答の選択肢
(63) あなたがひとり親家庭になったときに，生活上の援助はありましたか。①と②のそれぞれについて，あてはまるものすべてに○をつけてください。①あなたの親からの援助（注1）	1.お金の援助
	2.子育てについての援助
	3.住まいについての援助
	4.食料など物での援助
	5.そのような援助はなかった
(64) 現在は，次のような生活上の援助はありますか。①と②のそれぞれについて，あてはまるものすべてに○をつけてください。①あなたの親からの援助（注1）	1.お金の援助
	2.子育てについての援助
	3.住まいについての援助
	4.食料など物での援助
	5.そのような援助はなかった
(66) 親以外に，頼りになる人がいますか。	1.兄弟・姉妹
	2.友人
	3.近所の人
	4.職場の人
	5.成人・独立した子ども
	6.その他
	7.頼りになる人はいない
(44) お子さんのことで困ったことや悩みがあるときに，誰に相談しますか。あてはまる人すべてに○をつけてください。	1.同居の家族
	2.別居の家族・親せき
	3.元配偶者（子どもの親）
	4.近所の人
	5.職場の人
	6.それ以外の友人・知人
	7.保育園・幼稚園・学校などの先生
	8.母子・父子自立支援員などの公的な相談員
	9.その他
	10.誰もいない
(45) あなたが病気などのとき，お子さんの世話や，あなたの身の回りの世話は誰にたのみますか。あてはまる人すべてに○をつけてください。	1.同居の家族
	2.別居の家族・親せき
	3.元配偶者（子どもの親）
	4.近所の人
	5.職場の人
	6.それ以外の友人・知人
	7.ホームヘルパー
	8.その他の公的機関
	9.その他
	10.誰もいない

注1）②は元配偶者の親からの援助であるが，回答数の少なさから（「そのような援助はなかった」と無回答を合わせて9割），今回の指標作成からは除外した。

表3の設問（66），（44），（45）について，親と親以外の人からの受領サポートを確認するため，各設問の選択肢を，「家族・親せき」「家族・親せき以外の人」「制度」という3つのグループに再整理した（表4）。

表4　回答の選択肢のグループ分け

回答の選択肢	グループ分け
同居の家族	家族・親せき
別居の家族・親せき	
成人・独立した子ども	
兄弟・姉妹	
元配偶者（子どもの親）	
近所の人	家族・親せき以外の人
職場の人	
友人，その以外の友人・知人	
保育園・幼稚園・学校などの先生	制度
母子・父子自立支援員などの公的な相談員	
ホームヘルパー	
その他の公的機関	
その他	その他
頼りになる人はいない，誰もいない	いない

（3）変数

表3に取り上げている調査設問を親と親以外の人からの受領サポート，情緒的サポート・手段的サポート，緊急時の支援の3つのパターンに再整理した。分析で用いる変数は以下のとおりである。

1）親と親以外の人からの受領サポート

表3の設問（63）①と（64）①の回答を表5のように整理した。設問（63）①「ひとり親家庭になった時に親から生活上の援助はありましたか」については，回答の選択肢1～4に1つ以上該当する場合，「過去にあった」とした。5を選択した場合は「過去になかった」とした。設問（64）①「現在は，親からの生活上の援助はありますか」も同じく，回答の選択肢1～4に1つ以上に該当する場合，「現在ある」とした。5を選択した場合は「現在ない」とした。その上で，①ひとり親になった時と現在のいずれも親からの援助がない「過去も現在もない」，②ひとり親になった時に親からの援助がなく，現在は援助がある「過去になく・現在ある」，③ひとり親になった時に親からの援助があり，現在はない「過去にあり・現在ない」，④ひとり親になった時と現在のいずれも親からの援助がある「過去も現在もある」の4パターンに分けた。

親以外の社会関係については表3の設問（66）を使用した。表5に示すように，回答の選択肢1と5のいずれか1つ以上に該当する場合を「家族・親せき」とした。選択肢2と3のいずれか1つ以上に該当する場合を「家族・親せき以外の人」とした。選択肢6，7はそれぞれ「その他」と「いない」とした。

表5　親と親以外の人からの受領サポートにおける変数

		○をつけた選択肢	変数
親との関係	設問(63)①	選択肢1～4から1つ以上を選択	過去にあった
		5を選択	過去になかった
	設問(64)①	1～4から1つ以上を選択	現在ある
		5を選択	現在ない
親以外の社会関係	設問(66)	1, 5のうち1つ以上を選択	家族・親せき
		2, 3のうち1つ以上を選択	家族・親せき以外の人
		6を選択	その他
		7を選択	いない

2）情緒的サポート・手段的サポート

相談相手・世話を頼む人から母子世帯の情緒的サポートと手段的サポートを確認する。

情緒的サポートには表3の設問（44），手段的サポートには設問（45）を使用した。

表6に示すように，設問（44）で，回答の選択肢1～3のうち1つ以上に該当する場合を「家族・親せき」とした。選択肢4～6のうち1つ以上に該当する場合を「家族・親せき以外の人」とした。選択肢7と8のうち1つ以上に該当する場合を「制度」とした。9と10はそれぞれ「その他」と「誰もいない」とした。設問（45）も設問（44）と同様に整理した。

表6　ソーシャルサポートにおける変数

		○をつけた選択肢	変数
情緒的サポート	設問(44)	選択肢1～3から1つ以上を選択	家族・親せき
		4～6から1つ以上を選択	家族・親せき以外の人
		7, 8のうち1つ以上を選択	制度
		9を選択	その他
		10を選択	誰もいない
手段的サポート	設問(45)	選択肢1～3から1つ以上を選択	家族・親せき
		4～6から1つ以上を選択	家族・親せき以外の人
		7, 8のうち1つ以上を選択	制度
		9を選択	その他
		10を選択	誰もいない

3）緊急時の支援

河合（2013）は孤立状態であることを疑いなく承認できる指標として，「病気などで体が不自由な時に来てくれる人」（がいないこと）をあげた。本稿では母子世帯のソーシャルサポートと経済状況の重なりについても確認するが，その際，河合（2013）によるこの社会的孤立の指標を参考に表3の設問（45）を整理し，母子世帯の置かれている状況を検討する。

設問（45）について，回答の選択肢の1～9のうち1つ以上該当する場合，緊急時の支援者が「いる」とし，10を選択した場合を，緊急時の支援者が「いない」とした（表7）。

表7　緊急時の支援における変数

		○をつけた選択肢	変数
緊急時の支援	設問(45)	選択肢1～9から1つ以上を選択	いる
		10を選択	いない

4. 世帯の基本的特徴

母子世帯と社会的孤立を検討する前に,「困ったことがある時などに」親が「頼りになる」1,018世帯,「頼りにならない」413世帯,「親はいない」64世帯それぞれの基本的特徴を確認しておく。

調査対象となった母子世帯はすべて児童扶養手当を受給している世帯であり，所得制限があるため,全体的に収入が低い。表8で家計収支をみると,半数以上の「頼りになる」世帯と「頼りにならない」世帯,3割以上の「親はいない」世帯が「黒字でも赤字でもなくぎりぎりである」状況である。それ以外の世帯については赤字世帯が黒字世帯を大きく上回り，特に困難な家計状況であると思われる「赤字であり借金をして生活している」世帯が「頼りになる」世帯で12.4%,「頼りにならない」世帯で21.1%,「親はいない」世帯で28.1%である。

表8　家計収支　（単位：%）

	赤字であり借金をして生活している	赤字であり貯金をとりくずしている	黒字でも赤字でもなくぎりぎりである	黒字ではあるが貯金はしていない	黒字であり毎月貯金をしている	無回答
頼りになる(1018)(1)	12.4	20.2	53.7	4.2	7.9	1.6
頼りにならない(413)	21.1	18.6	51.6	3.4	4.1	1.2
親はいない(64)	28.1	23.4	37.5	7.8	3.1	0.0

注：(1) カッコ内は世帯数。表中の割合はこの世帯数を母数としたもの。以下の表も同様。

回答者の年齢は表9の通りである。「頼りになる」世帯は30代と40代に集中し，それぞれ4割以上である。「頼りにならない」世帯は40代が最も多く，51.1%で，50代以上が11.6%である。30代が31.2%である。「親はいない」世帯は40代が最も多く，42.2%である。30代20.3%で，50代以上は31.3%となっている。「頼りになる」世帯は母親の年齢が中年層に分布している。「頼りにならない」,「親はいない」世帯は母親の年齢が「頼りになる」世帯よりも高い層に分布しており，親の年齢も高いと考えられる。

表9　回答者の年齢　（単位：%）

	20代以下	30代	40代	50代以上	無回答
頼りになる（1,018）	8.4	41.0	45.2	4.3	1.1
頼りにならない（413）	5.3	31.2	51.1	11.6	0.7
親はいない（64）	4.7	20.3	42.2	31.3	1.6

母子世帯の親の現在の居住地は表10の通りである。「頼りになる」世帯は父親が同じ市町村が53.9%，母親が同じ市町村が64.0%である。「頼りにならない」世帯は父親が同じ市町村が38.7%，母親が同じ市町村が54.0%であり，いずれの状況でも，親は「頼りになる」世帯より低い。「親はいない」世帯は親が「亡くなっている」という割合が大きい。

表10　親の居住地　（単位：%）

	親の状況	同居している	同じ市内・町村内	道内	道外	亡くなっている	わからない	その他	無回答
父親	頼りになる（1,018）	13.9	53.9	13.8	2.6	13.0	2.0	0.3	0.7
	頼りにならない（413）	5.1	38.7	19.1	4.6	23.2	7.5	0.7	1.0
	親はいない（64）	3.1	1.6	4.7	0.0	85.9	3.1	0.0	1.6
母親	頼りになる（1,018）	16.3	64.0	14.6	1.7	2.3	0.4	0.2	0.5
	頼りにならない（413）	7.0	54.0	20.3	4.6	9.0	2.7	1.9	0.5
	親はいない（64）	3.1	3.1	3.1	1.6	84.4	3.1	0.0	1.6

子どもの学校段階[6]について，全体として，就学中の子どもがいる母子世帯が多い。その中で，小学校に通う子どもがいる世帯が多く，4割以上となっており，中学，高校に通う子どもがいる世帯はそれぞれ3割程度である。

---

[6] 詳細は，北海道大学大学院教育研究院（2018）『2017年北海道ひとり親世帯生活実態調査報告書』P11の表1－6－1（学校等段階別の子どもの人数）を参照して頂きたい。

仕事[7]について，母子世帯の9割が，現在，働いている。また，「臨時（季節雇用をふくむ）・パートタイマー」と「派遣社員・契約社員・嘱託」という非正規雇用が半数となっている。

母親と子どもの健康状況[8]について，母親が「健康である」のは6割程度であり，「通院している」，「通院していないが体調が悪い」という体調上の問題や不安を抱えている母親が3割を超えている。子どもが「みんな健康である」は7割強であり，「通院している病気がある子がいる」と「障害がある子がいる（難病をのぞく）」世帯がそれぞれ1割程度ある。

今回の分析対象となっている母子世帯は，全体的に経済面にも健康面にも余裕がないことが分かる。以下からは，「頼りになる」，「頼りにならない」，「親はいない」の3つのグループについて，それぞれのソーシャルサポートの状況から孤立問題の実態を確認していく。

5. 親と親以外の人からの受領サポート

(1) 親からの援助の時期と内容

表11－1～表11－4は，ひとり親家庭になった時と現在の親からの援助（お金の援助，子育ての援助，住まいの援助，食料など物での援助）を示している。

まず，親からのお金に関する援助の状況をみる（表11－1）。親は「頼りになる」世帯は，親からお金の援助について，「過去も現在もない」で70.0%，「過去になく現在ある」で2.4%，「過去あり現在ない」で16.3%，「過去も現在もある」で11.3%ある。「頼りにならない」世帯は「過去も現在もない」で90.8%，「過去になく・現在ある」で0.7%，「過去にあり・現在ない」で6.1%，「過去も現在もある」で2.4%ある。「親はいない」世帯は，「過去も現在もない」で87.5%，「過去にあり・現在ない」で12.5%ある。

表11-1　お金の援助　（単位：%）

	過去も現在もない	過去になく・現在ある	過去にあり・現在ない	過去も現在もある
頼りになる（1,018）	70.0	2.4	16.3	11.3
頼りにならない（413）	90.8	0.7	6.1	2.4
親はいない（64）	87.5	0.0	12.5	0.0

親からの子育てに関する援助について（表11－2）は，親は「頼りになる」世帯は，「過去も現在もある」が最も多く，49.1%である。「過去も現在もない」で35.3%，「過去になく現在ある」で5.8%，「過去にあり現在ない」で9.8%ある。

親は「頼りにならない」世帯は，「過去も現在もない」で69.5%，「過去も現在もある」で12.1%，「過去になく・現在ある」で4.8%，「過去にあり・現在ない」で13.6%ある。

---

[7] 注6と同報告書のP19の表2－1（現在，働いているか），表2－2（雇用形態）を参照されたい。

[8] 注6と同報告書のP12の表1－7（回答者の健康状況），P14の表1－10－1（子どもの健康状況）を参照されたい。

「親はいない」世帯は,「過去も現在もない」で73.4%,「過去にあり・現在ない」で21.9%ある。

表11-2　子育ての援助　（単位：%）

	過去も現在もない	過去になく・現在ある	過去にあり・現在ない	過去も現在もある
頼りになる（1,018）	35.3	5.8	9.8	49.1
頼りにならない（413）	69.5	4.8	13.6	12.1
親はいない（64）	73.4	1.6	21.9	3.1

住まいの援助については（表11－3），親は「頼りになる」世帯では,「過去も現在もある」は15.9%で,「過去も現在もない」は66.5%である。「過去になく・現在ある」は1.1%で,「過去にあり・現在ない」は16.5%である。

「頼りにならない」世帯の多くは,「過去も現在もない」で85.0%,「過去も現在もある」で6.1%ある。「頼りにならない」世帯の多くは，ひとり親家庭になった時にも現在も親から住まいの援助は受けていないことがわかる。

「親はいない」世帯は,「過去も現在もない」で76.6%,「過去にあり・現在ない」で20.3%である。

表11-3　住まいの援助　（単位：%）

	過去も現在もない	過去になく・現在ある	過去にあり・現在ない	過去も現在もある
頼りになる（1,018）	66.5	1.1	16.5	15.9
頼りにならない（413）	85.0	1.5	7.5	6.1
親はいない（64）	76.6	0.0	20.3	3.1

最後に，親からの食料など物での援助の状況を確認する（表11－4）。親は「頼りになる」世帯では,「過去も現在もある」が最も多く52.1%で,「過去も現在もない」は32.1%である。「過去になく・現在ある」で6.2%,「過去にあり・現在ない」で9.6%である。「頼りになる」世帯では半数以上がひとり親家庭になった時点においても，また現在も親から食料など物での援助を受けていることが分かる。

「頼りにならない」世帯は,「過去も現在もない」が最も多く65.1%ある。「過去も現在もある」は17.9%である,「過去になく・現在ある」で2.4%,「過去にあり・現在ない」で14.5%ある。

「親はいない」世帯は,「過去も現在もない」が最も多く78.1%である。「過去にあり・現在ない」は18.8%であった。

4種類の援助について,「過去も現在もある」という割合が大きいのは，子育ての援助と食料など物での援助である。反対に，お金の援助や住まいの援助は「過去も現在もない」という割合が大きい。

表11-4　食料など物での援助　（単位：%）

	過去も現在もない	過去になく・現在ある	過去にあり・現在ない	過去も現在もある
頼りになる（1,018）	32.1	6.2	9.6	52.1
頼りにならない（413）	65.1	2.4	14.5	17.9
親はいない（64）	78.1	0.0	18.8	3.1

(2) 親以外の人との関係

表12に示すように，親以外に頼りになる人については,「頼りになる」世帯で,「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」がおおむね同数となって，それぞれ半数前後があげている。「いない」が19.2%である。「頼りにならない」世帯では,「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」がおおむね同数でそれぞれ3割前後,「いない」とした世帯も44.3%ある。「親はいない」世帯は,「家族・親せき」,「家族・親せき以外の人」いずれも4割以上で,「いない」が25.0%である。

表12　親以外に頼りになる人　（複数回答，単位：%）

	家族・親せき	家族・親せき以外の人	その他	いない	無回答
頼りになる（1,018）	53.4	49.3	3.6	19.2	0.8
頼りにならない（413）	28.3	32.0	3.1	44.3	0.7
親はいない（64）	46.9	42.2	10.9	25.0	0.0

(3) 親および親以外の人からの受領サポートの状況ー小括

母子世帯における，親と親以外の人からの受領サポートについて，以下のことが確認できた。

1)「頼りになる」世帯

親からのお金の援助については，ひとり親家庭になった時点も現在もほとんど受けていないことが分かる。今回の調査対象である母子世帯は児童扶養手当を受給している世帯であり，また，生活保護を受給している世帯も含まれる。こうした制度を利用していることで，親に経済的な支援を求める可能性が高くないことも考えられる。

一方，子育ての援助は，5割弱がひとり親家庭になった時点も現在も受けている。前述した

ように，今回の分析対象とした母子世帯は，子どもが小学生である割合も大きい。そのため，ひとり親になった時点も現在も子育てニーズが高いと考えられる。子育ての援助がひとり親家庭になった時にあったが，現在はないという世帯が1割弱である。これは，現在に子どもの年齢や学年が上がることで，子育てのニーズが減少し，子育てについての援助が減っていく，またなくなっていることが考えられる。そして，ひとり親家庭になった時に子育ての援助がなかったが，現在ある世帯では，何か困った時に親から一時的な子育てに関する援助を受けていることが考えられる。

住まいの援助について，ひとり親家庭になった時点も現在も援助を受けている割合が少ないことが分かる。これは，本稿の分析対象が祖父母と生計同一ではない世帯であり，同居の形での援助が少ないためだと考えられる。ひとり親になった時点で特に生活の基本となるのは住居の確保である（家計経済研究所，1999）。ひとり親になった時に住居に関する援助を受けた世帯においては，親がこの部分で役割を担い，一時的に住居に関する援助を提供したと考えられる。

食料など物に関する援助は，親からの各種援助の中で，ひとり親になった時点も現在もある割合が大きい傾向にある。食料など物に関する援助は，手段的サポートの中で，より提供しやすい援助であると考えられる。また，家計のやり繰りについて困っている時の，一時的な援助という側面もあると考えられる。

親以外に頼りになる人は，およそ半数の世帯が「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」をあげた。ここで注目したいのは，親以外に頼りになる人がいないという世帯も2割程度と少なくないことである。親が若ければ，生活上の援助を提供できるが，親が高齢になると，生活上の援助もなくなっていく可能性がある。現時点で孤立している状態であるとはいえないが，親の加齢や親が死亡した時には，支援者がいなくなるリスクを抱えている。

2)「頼りにならない」世帯

困ったことがある時などに親が「頼りにならない」とした世帯は，当然ではあるが，親からの各種援助はほとんどない。しかし，それぞれの援助について，ひとり親家庭になった時にあったが，現在はないという世帯もみられる。「頼りにならない」世帯は母親の年齢が高い層で分布していることから，親の年齢も高齢であると考えられる。ひとり親家庭になった時点では，援助を受けていたが，親の高齢化により現在は援助が得られなくなっていると考えられる。また，親の居住地では，父親でも母親でも同じ市町村という割合は，親は「頼りになる」世帯より低い（表10）。遠く離れている場合には，何か困った事があったときに，援助が得られにくい可能性があると考えられる。

親以外に頼りになる人として，およそ3割の世帯が「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」をそれぞれあげている。一方で，「頼りになる人がいない」という回答が4割を超え，親は「頼りになる」世帯より高い。困ったことがある時などに親からの各種援助はほとんどないことに加え，親以外に頼りになる人もなく，サポートを提供する相手が誰もいないリスクに直面する。

3)「親はいない」世帯

「親はいない」世帯について注目したいのは，ひとり親家庭になった時点では子育て，住ま

い，食料など物に関しての援助があったが，現在はないという世帯の割合が2割以上となっていることである。お金の援助についても，ひとり家庭になった時にはあったが，現在はないという割合が1割以上である。「親はいない」世帯も母親の年齢が高い層に分布し，親の年齢も高く，亡くなっている。それにより，援助もなくなっていると考えられる。

親以外に頼りになる人として，およそ4割が「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」をそれぞれあげている。頼りになる人が「いない」のは2割を超える。何かあった時に，親からの援助が得られない中で，親以外に頼りになる人もなく，サポートを提供する相手が誰もいなく，ソーシャルサポートという点で孤立の状態に置かれるリスクがある。

6. 情緒的サポート・手段的サポート

以下では，相談する相手・世話を頼む相手から母子世帯の情緒的サポートと手段的サポートについて確認していきたい。

まず情緒的サポートである，子育ての悩みについての「相談相手」からみていく。表13は子どものことで困ったことや悩みがある時に相談する相手を示している。困ったことがある時などに親が「頼りになる」世帯は，「家族・親せき」が最も多く，77.9%である。ついで，「家族・親せき以外の人」が64.5%，「制度」が22.7%である。「誰もいない」は3.2%ある。

「頼りにならない」世帯は，「家族・親せき」で40.9%，「家族・親せき以外の人」で53.8%，「制度」で18.6%，「誰もいない」で19.1%ある。

「親はいない」世帯は「頼りにならない」世帯の分布とおおむね一致しており，「家族・親せき」で43.8%，「家族・親せき以外の人」で54.7%，「制度」で21.9%，「誰もいない」で10.9%である。

表13　子どものことで困ったことや悩みがあるときに相談する相手

（複数回答，単位：%）

	家族・親せき	家族・親せき以外の人	制度	その他	誰もいない	無回答
頼りになる（1,018）	77.9	64.5	22.7	1.8	3.2	0.6
頼りにならない（413）	40.9	53.8	18.6	2.9	19.1	1.2
親はいない（64）	43.8	54.7	21.9	3.1	10.9	1.6

次に，手段的なサポートである，世話を頼む相手についてみていく。表14は回答者が病気などの時に，子どもの世話や自分の身の回りの世話を頼む相手を示す。困ったことがある時などに親が「頼りになる」世帯では，「家族・親せき」が最も多く，90.4%である。「家族・親せき以外の人」で5.8%，「制度」をあげた世帯は0.8%しかない。また，「誰もいない」が6.3%である。

「頼りにならない」世帯では，「家族・親せき」が最も多く，58.8%である。ついで，「誰もい

ない」が30.8％である。

「親はいない」世帯は「頼りにならない」世帯の分布とおおむね一致している。「家族・親せき」が54.7％で,「誰もいない」が39.1％である。

表14　回答者が病気などの時に子どもの世話や自分の身の回りの世話を頼む相手

（複数回答，単位：％）

	家族・親せき	家族・親せき以外の人	制度	その他	誰もいない	無回答
頼りになる（1,018）	90.4	5.8	0.8	1.8	6.3	1.0
頼りにならない（413）	58.8	9.2	2.7	2.9	30.8	0.7
親はいない（64）	54.7	10.9	1.6	3.1	39.1	3.1

以上から，母子世帯の情緒的サポートと手段的サポートについて，以下の点を指摘できる。

相談相手という情緒的サポートについては，親が「頼りになる」世帯,「頼りにならない」世帯,「親はいない」世帯の多くは,「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」に支援を求める傾向にある。特に，親が「頼りになる」世帯は「家族・親せき」という回答は7割を超え，親は「頼りにならない」と「親はいない」世帯よりに高い。一方,「制度」とした母子世帯は2割前後にとどまる。親が「頼りにならない」世帯においては，相談する相手がいないもの2割弱,「親はいない」世帯でおよそ1割となっており，制度などの利用もされておらず，何か困った時に，サポートを提供する相手が誰もいないリスクに直面する。

世話という手段的サポートについては，親が「頼りになる」世帯,「頼りにならない」世帯,「親はいない」世帯いずれにおいても,「家族・親せき」が中心であることが分かる。特に，親が「頼りになる」世帯では9割を超えている。「家族・親せき以外の人」とした母子世帯は1割前後であり,「制度」とした母子世帯は特に低い。ここで注目したいのは，親が「頼りにならない」世帯と「親はいない」世帯では,「誰もいない」とするものが3割以上となっていることである。この層は明らかに社会から孤立されるリスクが高く，社会的対応が求められる層と言え，注目すべきと考える。

自由記述設問の回答からは，子育てや仕事，家事をはじめる手段的サポートにおいて，様々な葛藤を抱えていることが見られた。また頼りになるソーシャルサポートが少なく，人的な援助を求めている様子がうかがわれた。

まず，多くの母子世帯の母は，子どもが小さいため，育児に協力してくれる人を必要としていた。日常的に母はひとりで子どもを育てながら仕事するため，時間と体力不足を感じ，また，食事支度をはじめとする家事に手が回らない状況があった。仕事が遅くなった時や体調がすぐれない時の，育児や家事などを手伝ってくれる人も求めている。

◆　子供がまだ小さいため仕方ないが，思うように行動できない。市外へ買物に行きたい時は祖母がいないとダメ。家の中でも抱っこやおっぱいの時間がかかり，朝は支度に大変。

◆ 時間と体力不足で，子供にスポーツクラブや習い事をさせてあげられない。一時期，学習塾に通わせたが，送迎すると家事ができず，負担が大きく生活が大変だった。育児に協力してくれる人がいない状況が苦しい。
◆ 仕事・家事・育児を全て一人で行う事は可能だが，体調がすぐれない時は気持ちに余裕を持てない事も多く，しばしば助けてほしくなる時がある。
◆ 仕事で遅く帰ると，疲れて食事の支度がおっくうになり，そうざいで済ませたりして，回数が増えると食費が多くなって罪悪感を感じる。家の事や，子育てに関わる事，一人でこなしていると，ときどきものすごく疲れて，何もかもやる気がなくなってしまう。

また，「仕事と子育てを両立できない」というような記述も多かった。具体的には，仕事が遅くなる時に，子どもを預けられる所がなく，子どもはひとりで家に留守番で，心配や困っている状況があった。そして，仕事のため，学校の行事などに参加できない，普段は子どもを送迎することや宿題を見ることができない状況もあった。子育てと仕事の両立についての葛藤を抱えている母親も多くいることが分かる。しかし，経済的には厳しい状況であり，母が収入を確保するために，子どもとの時間を削り，子育て時間が少なくなる。仕事時間を減らせば，子どもと過ごす時間を確保できるが，収入が低くなり，生活費や子どもの教育費などを捻出することが難しくなるという問題がある。

◆ 朝から晩まで働いていると，子供が一人で留守番する事も多く，食事の用意やら寝る時間が遅くなってしまい，子供の成長に心配がある。
◆ 仕事が休めず，子供の学校行事に行ってあげられない事があり，子供がかわいそうに思う事がある。仕事の都合で子供の送迎はできないが，歩いて通うには学校が遠い。
◆ 子供が小さいと仕事とは両立が大変である。子供との一緒の時間をとると収入が少なく生活がくるしくなってしまう。
◆ 子供が小さく体調不良などで休む事も多々あり，給与が安定しない事と，子供が小さいため長時間働けない事です。その為正社員として働く事も難しく将来は絶望的です。

一方，家族・親せきと同居するまたは近くにいる場合，家事・子育て・住居などに色々援助があるため，生活面では少し安定する。例えば，お金の援助があるため，子どもの教育費などには困らないこと，また，食料と住居の心配がないこと，子育ての協力に関する記述がある。

◆ 私は幸いにも親と同居することで，又，資格のおかげで生活に苦労することはないが，多くのひとり親家庭の状況は非常に厳しいと感じています。
◆ 私の場合は実家の親からの援助（貯金や車の購入，娘の学費）があり不自由なく生活している。もしこれがなくなったら生活はとても苦しいものになっていたと思うし，娘の進学も制限されてくると思う。
◆ 実家で食べ物，住居の心配がないので，国からいただいている児童扶養手当や児童手当で子供に学資保険などもかけてげられてますが，同居でなければ生活保護を頼らなくては生活が困難であると日々感じています。

◆ 子供に淋しい思いをさせているのではないかと思う時があるが，歩いて行ける所に元夫が住んでおり，交流等があるため，金銭面以外で大変と思う事はない。

また，家族・親せき以外の人が近所にいて，緊急時に子どもを預ける場所があり，仕事を安心してできるという記述もあった。

◆ 親友も近所に住んでおり，何かあった時に助けてくれるため，安心して仕事ができている。

ソーシャルサポートを利用しているという自由記述は全体的に数が少ない。しかし，限られた自由記述を見ていくと，ソーシャルサポートがある場合，生活面に少し安定する様子がうかがえた。

7. 緊急時の支援

前述した「世帯の基本的特徴」でも確認したように，今回の調査対象世帯は全体的に所得が低い。世帯の経済状況とサポートの有無や孤立との関連については今後，さらに詳細な分析を行う予定であるが，ここではその1つの例として，経済状況と緊急時の支援についてみておきたい。前掲の表8では，親が「頼りになる」世帯，親が「頼りにならない」世帯，「親がいない」世帯の家計収支の状況を確認した。表8のそれぞれの世帯を，緊急時の支援者がいるか否かに分けて家計状況を示したのが表15である。

困ったことがある時などに親が「頼りになる」世帯では，「赤字であり貯金をとりくずしている」については，緊急時の支援者がいる世帯といない世帯の割合はほとんど同じ程度である。「赤字であり借金をして生活している」については，緊急時の支援者がいる世帯が11.8%であるのに対して，いない世帯は20.3%と，やや高い傾向にある。

親が「頼りにならない」世帯では，「赤字であり借金をして生活している」と「赤字であり貯金をとりくずしている」については，緊急時の支援者がいる世帯といない世帯の割合はほとんど同じ程度であり，それぞれは2割前後となっている。

「親はいない」世帯では，「赤字であり借金をして生活している」については，緊急時の支援者がいる世帯は29.7%となっており，いない世帯が25.9%である。「赤字であり貯金をとりくずしている」については，緊急時の支援者がいる世帯で1割程度であり，緊急の支援者がいない世帯は4割を超え，何か困ったことがある時に，支援を提供する相手がなくかつ，経済状況が厳しいという状態である。

表15　緊急時の支援者の有無にみた家計状況　（単位：%）

	緊急時の支援者	赤字であり借金をして生活している	赤字であり貯金をとりくずしている	黒字でも赤字でもなくぎりぎりである	黒字ではあるが貯金はしていない	黒字であり毎月貯金をしている	無回答
頼りになる（1,018）	いる（944）	11.8	20.3	54.1	4.3	8.1	1.4
	いない（74）	20.3	18.9	48.6	2.7	5.4	4.1
頼りにならない（413）	いる（283）	21.2	18.4	51.2	3.2	4.6	1.4
	いない（130）	20.8	19.2	52.3	3.8	3.1	0.8
親はいない（64）	いる（37）	29.7	10.8	40.5	13.5	5.4	0.0
	いない（27）	25.9	40.7	33.3	0.0	0.0	0.0

以上から，経済状況はきびしくかつ，緊急時の支援者がいないという困難が重なっている世帯が一定数存在することが分かった。とりわけ，留意すべきで，社会的対応が求められる層と言える。なお，河合（2013）は，クロス表で年間収入別緊急時の支援者の有無を見た結果，緊急時の支援者がいないの人方が収入が少ない傾向にあることを確認した上で，因子分析によって抽出された「経済状況の不安定さ」を示す因子の得点の平均を，緊急時の支援者の有無別に集計し，その得点差にもとづいて，「緊急時の支援者のいないグループは，明らかに経済的に不安定である」と結論している。本稿はクロス表で得られた知見は，河合（2013）のクロス表で得られた知見と一致しているが，因子分析などを行っておらず，緊急時の支援者がいないグループの方が経済的に不安定であるという明確な傾向を確認するには至っていない。この点は今後の課題としたい。

自由記述の中にも緊急時の支援者に関するものがあった。例えば，子どもが病気の時に支援者がいないため，子どもの病気も仕事も対応が大変であるという母親は多く見られた。周りの支えを求めたい様子がうかがわれた。

◆　自分の親や兄弟などが近くにおらず，子供が病気の時は仕事対応が大変。中々休むわけにもいかず，休むと嫌な目で見られる。預ける病院（病児保育）を行っている所も少なく，料金も高いため，中々利用できない。
◆　親にも誰にも頼れない人は仕事もない。子供が風邪を引いたら仕事を休み，子供が休みの日も仕事を休まなければならない。続けて仕事に行けない。仕事がしたくてもできません。
◆　子供の面倒，仕事環境が整っていないと，子供との生活が大変になるので，助けてもらえる人をそばに見つけた方がいいと思います。

また，こうした実情が，母親の就労時間帯の制限や，仕事に制約を課している。正社員になること，そもそも仕事先を探すことをとても難しく感じた母親も多くいた。

◆ どんなに仕事を頑張ろうとしても，子供の病気や行事で休む事を言われ，仕事が限られてしまう。親や頼れる人がいれば話は変わるが，資格を取っても同じ理由で断られると，正直，心が折れそうになる。
◆ 子供は実家の親が苦手で預けられないため，子供が病気や精神不安の時は私が仕事を休まなければならないので，パートでしか働けない。
◆ ひとり親家族で実家が近くにない人は，母親が仕事先を探すだけで大変な事である。

目の前の生活は特に大変なことがないけど，将来の生活を考えると不安を感じている母親も多くいた。例えば，母親自分が病気になり，働けなくなった時の経済的面の心配があげられる。親族が近くいないまた頼れない，また親族以外にも頼れる人がいないため，子どもの面倒を見る人がいないことは不安である。とりわけ，この不安は障害児のいる世帯で大きいだろう。

◆ 今現在は健康で働けているが，病気等で働けなくなった時の事を考えると不安です。
◆ 自分が病気になり身の回りの事ができなくなったり，仕事へ行けなくなった時に色々な負担の大きさを感じる。
◆ 私自身入院死亡した場合，血縁で頼れる人がいないので，残された子供達がどのように過ごして行けば良いのかという不安。
◆ 母子家庭で満足のできる収入を得る事は難しい。老後どう生活して行けば良いのか，全く先が見えない。発達障がいの娘を育てながら今現在の生活が精いっぱいで，私が病気になったら，もう終わりだと思っています。考えても，答えは出ないので…，メンタル的につらいです。

さらに，将来，自分の親の病気等による介護に対する不安を抱えている母親もいる。

◆ 先を考えると今のままでは収入も少なく，公的支援や親に頼る生活では今後不安が多いです。親も70代と高齢の為，今後，介護などの問題が出てきたら共倒れになってしまうのではないかと考えてしまいます。

経済的に不安定であり，また厳しい状況を脱出できる見通しもなく，常に不安を感じている母親の中には，メンタル上の問題や不安も抱える人もいる。

◆ 経済的に不安定で，いつも明日はどうなるであろうという不安を感じる事がよくある。子供の進学も，まとまったお金がなく，積極的に進める事ができません。
◆ 先が見えない事，子供達を負の連鎖に巻き込んでしまわないかと不安を感じます。あと，自分が死んだら，諸事情により，親・兄弟は頼れず，子供は施設に行く事になるのも不安の一つ。色々あり過ぎて自律神経失調が治りません。
◆ 仕事や子育ての事は結局は1人で抱え込むお金の事を考えたら，いやになる，心にゆとりをもちたい。

8. まとめ

以上,「北海道ひとり親調査」を用い，困ったことがある時などに親が「頼りになる」,「頼りにならない」,「親はいない」の3つのグループに分けて，母子世帯が受けている親および親以外の人からの受領サポートと情緒的・手段的サポートを確認した。さらに，家計状況に着目し，経済状況の厳しさと緊急時の支援者がいないことの重なりについても確認した。これらソーシャルサポートの特徴，および母子世帯が直面し得る社会的孤立の問題は以下である。

まず，親からの金銭的援助について,「親はいない」また「頼りにならない」世帯で受けた経験のある世帯が少ないのは当然のようにも思われるが，親がいて頼りになる世帯であっても，金銭的な援助を受けた経験のある世帯は少ない。親の状況にかかわらず，ひとり親になった時点も現在も，お金に関する援助が得られにくいという状況を確認できた。金銭的な支援と比べて，子育てや食料など物での援助を受けた経験のある世帯は多い。しかし，親が「頼りにならない」,「親がいない」世帯では，こうした援助を受けた経験のない世帯が多い。また，住まいの援助については，金銭的援助と同様に，親の状況にかかわらず，ひとり親になった時点も現在も少ない。親と地理的に離れた場所で生活していたり親が高齢化している場合，住居のサポートを得られにくいと考えられる。

親以外の人からの受領サポートについて，多くの母子世帯は,「家族・親せき」と「家族・親せき以外の人」を頼りになる人としてあげている。しかし，特に，親が「頼りにならない」世帯においては，頼りになる人がいないという回答が4割を超えていた。

また，相談する相手・世話を頼む相手から母子世帯の情緒的サポートと手段的サポートについて確認した。相談という情緒的サポートでは，多くの母子世帯は家族・親せき，また職場・近所の人などに相談し，制度を利用することは少ない。一方，世話という手段的サポートでは，ほとんど家族・親せきが中心であることが分かった。相談という情緒的サポートに比べ，世話という手段的サポートについて家族・親せき以外の人に頼む，また制度を利用するという回答は少ない。

相談する相手という情緒的サポートより，世話を頼む相手という手段的サポートの方が受けにくいという点について，高齢者における情緒的サポート・手段的サポートの特徴（Koyano, 1994）と符合する。ただし，母子世帯の受領サポートの内容は高齢者との違いがあると考えられる。高齢者の場合，自分自身のことについて，悩み相談また世話をする相手を求めることが中心になるのに対して，母子世帯の母親は子どもに関する悩みの相談や世話を頼む相手を求めることが中心になると考えられる。

本稿では，緊急時の支援の有無と経済状況に着目し，経済状況の厳しさと緊急時の支援者がいないことの重なりについても確認した。ここでは，分析方法に限界もあり，緊急時の支援者がいない世帯は明らかに経済的に不安定である（河合, 2013）ことは確認できなかったが，一定数の母子世帯が緊急時に支援者がいなくかつ，経済状況も厳しいという困難が重なっていることを確認できた。経済的に安定的な基盤がある場合は，受領できるソーシャルサポートの少なさを，市場サービスの購入によってある程度補うことができるかもしれない。しかしながら，こうした補完を行うことが困難な世帯が少なくない。

さらに，自由設問の回答からも，多くの母子世帯が，家事・子育て・仕事という手段的サ

ポートに様々な葛藤を抱え，また頼りになるソーシャルサポートが少なく，援助を求めている様子がうかがわれた。緊急時の仕事と子育ての対応に関して，周りの支えを求める様子がうかがわれた。加えて，経済的不安定をはじめ，親の介護や障害のある子どもを世話すること，将来に対する不安を抱えている母親も多く見られた。緊急時に子育てをはじめとする手段的サポートを提供することが重要である。また，先が見えないような不安などがメンタル上の問題に至る状況になる前に，気軽に相談できる，情緒的サポートを提供するネットワークも重要であると考える。

母子世帯おけるソーシャルサポートについて，親が中心的な役割を担っていることが確認できた。しかしながら，親に偏った形のソーシャルサポートは万全ではない。親が高齢化したり，亡くなると，その支援自体がなくなり，母子世帯の生活基盤を脅かすことになる。したがって，公的制度・支援を積極的に利用できるように，十分に機能させていくことは最も重要な課題である。しかしながら，ひとり親世帯にかかわる制度や支援政策について，ハローワーク以外の認知度と利用率が低いという実態がまだ存在する。さらに支援の情報が得られない，利用の際に差別的な対応をされるなど，利用しにくい課題がある（江，2020）。また，国の進めるひとり親世帯への支援は，仕事と子育ての両方を一人で担わなければならないひとり親に対して，子育てと仕事の両立を可能とする施策が展開されていないという指摘もある（熊谷，2020）。そのため，今後は，病児保育施設や保育サービスを増やし，子育てと支援を両立できる施策が充実していくこと，社会資源につながれる相談，また孤立を防ぐ，ひとり親のニーズにあった事業など，必要なひとり親支援施策を展開していくことが重要である（赤石，2014）。さらに，公的機関における福祉制度や支援情報が，多くのひとり親世帯に認知されること，そして，公的機関や窓口の職員の対応の改善も課題である（江，2020）。

最後に，本稿のアンケート調査にもとづく量的把握は，個々の母子世帯の生活の現実（孤立状態の具体的な場面など）を知るという点では限界がある。質的調査を通して，母子世帯の孤立の実態を把握することも必要である。また，社会的孤立問題が生み出さている社会的背景，福祉政策，非正規雇用など生活の不安定性をもたらす社会構造についての把握も必要である。さらに，母子世帯の孤立問題を検討する際に，ふたり親世帯との比較や，祖父母同居の有無といった点からの分析も必要である。これらは今後の課題としたい。

文献

赤石千衣子（2014）『ひとり親家庭』岩波新書

阿部彩（2014）「包摂社会の中の社会的孤立―他県からの移住者に注目して―」『社会科学研究』65巻，1号，13-30

北海道大学大学院教育研究院（2018）『2017年北海道ひとり親世帯生活実態調査報告書』

岩田美香（2013）「子育てと社会的孤立」河合克義・菅野道生・板倉香子編著『社会的孤立問題への挑戦－分析の視座と福祉実践』法律文化社，36-52

江楠（2020）「未婚母子世帯の生活と社会関係―北海道ひとり親家庭生活実態調査より」『教育福祉研究』第24号，21－39

河合克義（2013）「社会的孤立問題とは何か」河合克義・菅野道生・板倉香子編著『社会的孤立問題への挑戦－分析の視座と福祉実践』法律文化社，3-22

熊谷良介（2020）「きょうだい数と子どもの年齢からみるひとり親家庭における子育てと就労―北海道ひとり

親家庭生活実態調査をもとに―」『教育福祉研究』第24号，5－19
斉藤雅茂（2018）「高齢者の社会的孤立と地域福祉―計量的アプローチによる測定・評価・予防策」明石書店
鳥山まどか（2020）「北海道におけるひとり親世帯を対象とした生活実態調査」『教育福祉研究』第24号，1－4
富樫ひとみ（2007）「高齢者の社会関係に関する文献的考察―社会関係の構造的特質の検討」『立命館産業社会論集』第42巻第4号，65-183
Townshend.P (1963) The family life of old people: an inquiry in East London,Penguin Books/山室周平監訳（1974）『居宅老人の生活と親族網―戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版株式会社
Wataru Koyano,Michio Hashimoto,Tetsua Fukawa,Hiroshi Shibata ,Atsuaki Gunji (1994)「The social support system of the Japanese elderly」『Journal of Cross-Cultural Gerontology』9，323–333
山野良一（2017）「母子世帯および子育て中の母親の社会経済状況，社会関係資本，抑うつについての研究：「生活と支えあいに関する調査」データ分析から」『社会保育実践研究』1号，15－42
財団法人　家計経済研究所（1999）『ワンペアレント・ファミリー（離別母子世帯）に関する6ヵ国調査』大蔵省印刷局

Social Isolation Among Single Mothers: From the Perspective of Social Support

Nan JIANG*

Key Words

Single Mothers, Social Isolation, Social Support, Means support, Emotional support

Abstract

The purpose of this study is to evaluate social support, namely, support(from parents or individuals who are non-parents), means and emotional support among single mothers. These mothers are been segregated into three main groups based on how their parents respond to their needs ("dependable", "unreliable", or "pass on") when they are faced with problems or difficulties. In addition, this study also investigates the overlap between single-mothers' emergency support (whether they have someone to look after their children or take care of themselves when they are sick) and their economic conditions (good or bad).

This study reveals 3 main results. Firstly, in the case of support (from parents or individuals who are non-parents), single-mothers' parent support plays an important role. However, there are a certain number of single mothers who have no one to rely on. Secondly, many single mothers receive informal support as a form of emotional support from non-family members. On the other hand, for means support, there is a high tendency that the mothers seek support from their families and only a small group of them receive support from non-family members and other institutions. Lastly, there are also many single mothers who are struggling to make ends meet and at the risk of receiving no support in time of emergency.

* Graduate School of Education, Hokkaido University